群馬県総合教育センター
53号
令和７年10月

ぐんま幼児教育センターだより

ＡＩと子供の学びを考える

群馬県総合教育センター
所長 西村　琢巳

昨今、人工知能（ＡＩ）について、様々な場面で接することが多くなりました。実際、使ってみると便利なものです。生成ＡＩは、相談相手として十分な役割を演じてくれます。このＡＩについてですが、どのような原理で動いているのか調べてみると、案外、単純なものであると気付きます。ＡＩはネット上の大量のデータを参照して、問いに対する回答を作成するプログラムです。その回答作成の原理は、データの結び付きの度合いを統計的に吟味し、あてはまりそうな記号（文、単語、画像など）を数学にもとづいて予測計算しているにすぎません。したがって、ＡＩは、大量な電子データとそれを処理するプログラムによって成立しており、逆に言えば、電子データ（数値）化できないものについては、処理できないことになります。

ひるがえって、人はどうでしょうか。人は、ＡＩのような大量のデータを扱わないにもかかわらず、物事を認識したり、将来を予測して行動したりできます。例えば、犬や猫を何匹か見れば、犬と猫の区別ができるようになります。このような効率性は、ＡＩには実現できないことと思います。赤ちゃんは、生後１歳にならないうちから言葉を覚え始め、３歳頃にはかなりの語彙力をもちます。人が実現する学習スピードと効率性は驚異的なものです。

人の驚異的な学習は、身体性に大きく依存していると自分は考えています。物事の習得は、脳だけでなく身体全体の発達と連動しています。だからこそ、幼児期には「遊び」「運動」「触れ合い」がとても大切です。言語習得を例にとっても、言葉を教えるより、身体を使って感じて、動いて、関わることが言葉の芽を育てることになります。ＡＩが今後発展するには、人と同じような身体性がＡＩ上に実現できるかどうかだという議論があるほどです。

ＡＩについて考えていると、人の優位性や独自性がむしろ明確になります。幼児のうちから、机に向かって読み書きの練習のみを行ったとしても、到底ＡＩほどのデータを扱うようにはなれません。ＡＩには実現できていない、人としての身体性に注目すべきと言いたいのです。子供のうちから人としての全ての感覚を大いに刺激し、豊かなものにすべきと思います。身体を伴った遊びの重要性が指摘されますが、人の学習スタイルを考えればごく自然なことです。幼児期から、ＡＩのような学習、つまり知識の習得に重きを置きすぎると偏った学習となり、人としての学習の優位性をそこなう可能性があります。

かねてから、子供はもっと外遊びをしてほしいと思っていました。友達と一緒に外で遊んでほしいと思っていました。体全体を使って遊んでほしいと思っていました。ＡＩに接するとき、その考えは間違っていないと改めて思います。

お問い合わせ
総合教育センター
幼児教育センター
☎ 0270-26-9203
✉ youji@edu-g.gsn.ed.jp

今年度の研修講座

～実施状況と受講者の声～

ぐんま幼児教育センターだより
53号をお届けします！

１ページ：群馬県総合教育センター所長による巻頭言
２ページ：今年度の研修講座について
３ページ：今年度の調査研究について
４ページ：幼児教育に関するコラム

幼稚園等新規採用教員研修

研修日数６日（集合３日オンライン３日）

環境の構成について、ものの配置だけではなく、人や空間全部を含めての環境であることを学び、もう一度自分の保育の環境を見直したいと思いました。

乳幼児期における発達を実際に働いた後で改めて理解することで、再確認できました。幼児との関わりに一貫性をもつことが大切であると聞き、今後の保育で自分の幼児との関わりを見つめ直していきたいと思いました。

幼稚園等中堅教諭資質向上研修

研修日数４日（集合２日オンライン２日）

環境の構成で1番大切なのは状況を作ることと聞き、なるほどと思いました。難しく考えがちですが、それを意識して保育に生かしていきたいです！

「カウンセリングマインド」の講義について、演習にあったような保護者からの相談や問い合わせに戸惑ったり、どう答えてよいか困ったりすることがよくあったので、今後の参考にしたいと思いました。

幼児教育と小学校をつなぐ研修講座

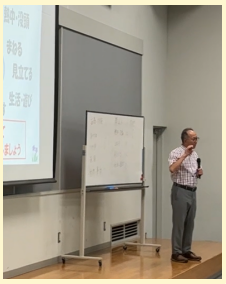
〇８月６日（群馬大学教授　郡司明子先生・幼児教育センター　中村崇センター長）

たくさんの実践事例を見せていただき、やってみたい、自分なりに工夫して授業や教室の環境づくりに生かしたい、と思うことがたくさんありました。私の専門は家庭科ですが、図工・美術と似ていて、家庭科も活動を豊かにするために子供が「もの」と対話する時間を大切にしてみたいと思いました。

教材研究、教材工夫のやり方のヒントをいただけてありがたかった。塩ビ管とブルーシートを使ってのプールづくり、凧製作など、今後取り入れていきたいです。

〇８月１９日（元文部科学省初等中等教育局主任視学官　嶋野道弘先生）

子供たちはただ遊んでいるだけに見えても、体でいろいろなことを感じながら、無自覚的に学んでいることを学びました。これから子供のことを見ていくうえで、ただ子供のことを見るのではなく、表情や仕草、振る舞いなどに着目し、子供の気付きや学びに寄り添っていきたいと思いました。



あっという間の2時間でした。今回の講義は小学校の先生も参加していたので、小学生のエピソードも聞くことができ、有意義な時間になりました。見取りができているようで、できていなかったと反省しました。自ら学ぶ力を大事にして焦らずに見守り、教えていただいたことを2学期に生かしていきたいと思います。

保育カフェ

〇 6月20日　みんなで語ろう（環境の構成）

ゆったりとした温かい雰囲気の中で、いろいろな園の先生方と話が出来てとても有意義な研修となりました。どの園でも、気になる子に対しての環境の整え方に日々、試行錯誤しながら保育をしているとのことで、各園の取り組んでいること、環境の工夫を具体的に聞き情報交換できたことがとても参考になりました。

〇 ９月３日　みんなで語ろう（幼保こ小連携・接続）

連携の際、小学校と園とが互いに気を遣ってしまう場面があるというお話がありましたが、これまで取り組んできたことを振り返ったときに自身もそうであったと思いました。子供たちの安心や成長のために、職員同士もよりよい連携を図っていきたいと感じました。

今後の予定（夕やけ保育研修会）まだまだ受付中です！

〇11月14日(金)　「学校園における子育ての支援と課題」
共愛学園前橋国際大学　研究員　前田　由美子　先生

〇12月25日(木)　「幼児期・小学校低学年におけるインクルーシブ教育」
日本大学文理学部教育学科　教授　田中　謙　先生

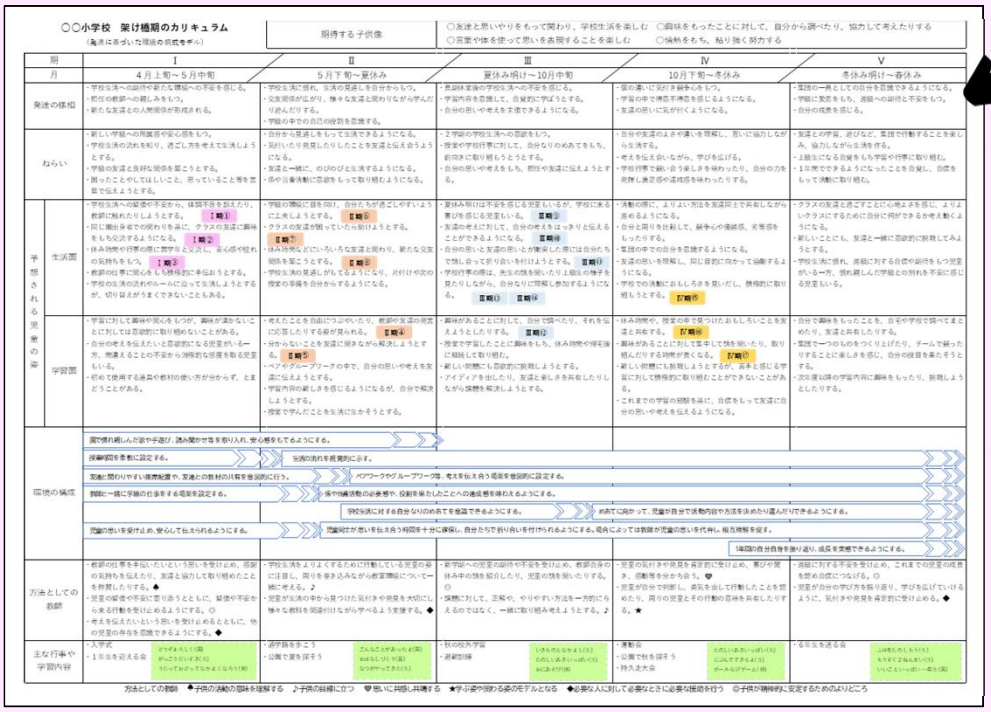
申し込みコチラ

令和７年度研究について

研究テーマ

子供に内在する非認知能力の発揮及び伸長を促す架け橋期の教育
～２年次～
―「ぐんま架け橋プログラム」の開発・実践・普及過程を通して考える―

今年度の幼児教育センターは、昨年度の研究を基に「ぐんま架け橋プログラム」を開発し、各自治体や幼児教育施設、小学校等において実践・普及することを目指しています。これまでに、県内の１０以上の地域で講演会や研修会を実施しており、実際に当センターの研究に基づいて架け橋期のカリキュラムを作成してくださっている地域も増えてきています。



小学校向け
「発達に基づいた環境の構成モデル」

幼児教育センターウェブページより、Excelデータをダウンロード可能！
使い方シートも公開しています。

各小学校で編集してそのままお使いいただける形式･内容です。

☆講演会、研修会を実施した（する予定の）地域　10/1現在

＜市町村＞
- ○高　崎　市（高崎市幼保小連絡協議会）
- ○桐　生　市（幼小をつなぐ研修講座）
- ○伊勢崎市（教育研究所幼保こ・小連携研修講座）
- ○渋　川　市（渋川市幼こ保小実務者研修会）
- ○富　岡　市（幼保小の架け橋プログラムについての講演）
- ○みどり市（園・学校連絡協議会実務者会議）
- ○中之条町（教育研究所幼児教育研究班）
- ○長野原町（教育研究会幼児教育研究部講演会）
- ○千代田町（就学時教育支援研修及び情報交換会）

＜小中学校区＞
- ○高　崎　市（吉井中央中校区幼小中連携会議）
- ○桐　生　市（新里町こ小中連携会議・菱小学校区保小交流会）
- ○伊勢崎市（二中地区幼保こ小連携情報交換会）

＜その他＞
- ○中部教育事務所（先生のためのサポート研修）
- ○吾妻教育事務所（管内小中学校教頭会）

受講者の声

架け橋期のカリキュラムについての理解が深まると同時に、日々の子供たちとの関わりの具体的なイメージが沸き、前向きに取り組もうという思いが受講者から感じられた。（伊勢崎市）

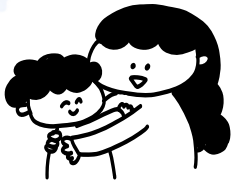
接続について、理論に基づいて具体的な場面が浮かぶ分かりやすい話だった。普段交流できない小学校や他園の先生方との交流の機会がもててよかった。グループができたので、より具体的にカリキュラム作成等の話合いがしたい。（渋川市）

事後のアンケートにおいて、ご回答いただいた先生方からは、「これからの教育や保育にいかしたい」「校内（園内）研修で全員の職員に伝えたい」などと、支援の工夫に加え、教職員への校内（園内）研修につながるコメントを多数いただきました。（高崎市）

架け橋期のカリキュラムを難しいものだと感じ、構えてしまっていたが、小学校ともっと気軽に、対等に交流していけばよいと分かった。年長～小学校だけでなく、今日～明日のように細かいところから全てつながっているのだと改めて感じた。（長野原町）

絶賛受付中です！

安心感



園と小学校の円滑な接続に向けて

幼児教育センター
指導主事　木村　弘子

先日、あるこども園で保育を参観させていただく機会がありました。その日は町内の学校区の幼児教育施設と小中学校の先生方が集まったため、園内はたくさんの人でごった返していました。いつもの園とは明らかに違う雰囲気の中、知らない大人に積極的に話しかけて遊びに誘おうとする幼児がいる一方、普段どおりに自分がやりたい遊びに夢中になっている幼児もいます。園内は概ね賑やかで、子供たちの元気な声が響いていました。

０、１歳児のクラスに入ると、ちょうど軽食を食べる時間だったのですが、みんな静かに椅子に座って出された軽食を食べています。先生が子供たちに話しかけていますが、なかなか反応がありません。子供たちは、クラスの中にいる知らない大人たち（参観者）の顔をじっと見ています。私は子供たちを緊張させてしまったかな？と思い静かに保育室を出ました。

保育参観後に先生方と話す機会がありました。０、１歳児の担任の先生は、保育参観中は子供たちの様子がいつもと全く違っていたことに戸惑ったと話してくれました。静かに席について、黙々と軽食を食べる様子は、参観者からすると一見行儀のよい子供たちに見えたかもしれません。しかし担任の先生の目には、委縮して周囲を警戒する、いつもとは明らかに違う子供たちが映っていました。参観者が保育室から去った後は、いつもどおりの様子に戻り、先生に甘えたり活発に動き回ったりし始めたそうです。担任の先生は、それは子供たちが保育者である自分たちを信頼し、安心している姿なのだと気付いたと話してくださいました。

０、１歳の子供たちも、いつもとは違う環境や、知らない大人に囲まれると緊張し、委縮してしまいます。安心感をもてない環境の中では、やりたいことに自分から挑戦すること、主体的に動くことなどできないのです。これは０、１歳の幼児だけでなく、子供でも大人でも同じことが言えるのではないでしょうか。新しい環境や、普段とは違う環境の中で自己発揮するということはとても難しいことなのです。

小学校入学後の子供たちは、新しい先生、新しい友達、慣れ親しんだ園とは全く違う環境の中で、日々過ごすことになります。よい姿勢で席にじっと座っている姿は「行儀がいい」とか「一年生らしい」などと手放しに褒めることなのでしょうか。委縮して緊張し、自分らしさを出せていない姿なのかもしれません。私自身も、一年生を担任したときに、入学後とても楽しそうに生き生きと過ごしていた（と私が勝手に思っていた）児童の保護者から、朝学校へ行きたくないと突然言い出し困っているとの電話を、入学後しばらくしてから受けたことがありました。その当時は思い当たる原因が全くなく、保護者と共に頭を抱えてしまいました。しかし、今思えば教室でその子が見せていた姿は、新しい環境の中、一年生としていい格好をしようと無理をしていた姿だったのだと思います。

一年生の先生に限らず言えることですが、教育の場において、子供たちが「安心感」を感じることができる環境を作ることはとても大切です。特に小学校入学直後、子供たちは私たち大人が考えている以上の緊張や不安を感じていることがあります。それは見えづらく、本人も無自覚な場合があります。表面に現れた行動だけを安易に褒めたり叱ったりすることなく、まずは子供たちが安心して自分を出せる環境を作ることに注力し、新しい一歩を踏み出せるよう、子供たちに関わる大人が協力して支援していきましょう。